



ADCA活動報告

ADCA 地方セミナー「農業農村開発と国際貢献」開催

平成23年11月14日（月）に「農業農村開発と国際貢献」をテーマに北海道大学 学術交流会館大講堂に於きまして、地方セミナーを開催致しました。

ADCA ではこれまでも毎年、世界の農業農村開発のあり方について国際協力の関係者（JICA 等国際協力実施機関、大学等研究機関、コンサルタント、ゼネコン、NGO 等）と今後の可能性、方向性について、我が国の農業農村開発協力の実績を振り返りながら、共に考えていく事を目的にセミナーを開催して参りました。

この度のセミナーは、首都圏に集中しがちな政府開発援助における農業農村開発の情報について広く地方にも発信することを目的に、関係者のみならず、一般、学生の皆様にも我々の活動を知って頂くため、札幌での開催の運びとなりました。



久野副会長の開会挨拶

基調講演：「アフガンに命の水を」

基調講演では、医師である中村氏が農業土木事業を実施するに至った経緯及び、国際貢献の在り方について講演が行われました。

ペシャワール会は 1983 年に発足し、以後パキスタン、アフガニスタンにおいて診療活動を行ってきました。農業土木事業を開始する契機となったのは、2000 年に発生した大旱魃でした。旱魃に伴う水路消滅によって、清潔な飲料水および十分な食料を確保できなくなった多くの人々が感染症に罹りました。「感染症予防には衛生的な水と十分な食料が必要である」との信念の下、水源確保のため、1600 ヶ所に及ぶ井戸やカナートの建設、全長 25.5km に及ぶ農業用水路等の建設を行いました。



中村哲氏(ペシャワール会 PMS 総院長)

中村氏は、医療においても農業土木事業においても、「その土地の技術を用いることが重要」であると考えており、用水路建設では最新の技術を用いず、日本の伝統的な技術（斜め堰、蛇籠工など）を採用し、石積技術に長けた彼らの伝統的技術を融合させ、容易で強固な独自の利水システムを生み出しました。これらの技術はアフガニスタンにおいても大きな効果を発揮している事が紹介されました。

最後に、中村氏は「実現性および持続性の高い国際貢献が重要であり、そのような国際貢献の達成には最新技術の導入ではなく、現地の天の時・地の利・人の和に即した技術の使用が必要である」とのお考えを述べられました。

講演：「半乾燥地における農業と砂漠化問題」

長澤氏の講演では半乾燥地農業に係る水土資源利用がもたらす砂漠化の主な要因について、中国での二つの事例をもとに報告が行われた。

黄土高原における土壤保全問題では、土壤の表面流出を抑制するためのテラス工、土地保全を促進するための魚鱗工や植林等の対策による成果と山羊放牧による食害等の問題点等が示された。

また、タリム河流域に展開する灌漑農業については、上・中流域での過剰利用による下流への配分不足や地表面の深刻な塩類集積に悩まされており、農地の放棄、土地劣化による砂漠化の拡大防止として、灌漑グリーンベルトなどの対策が図られていることが報告された。

まとめとして、半乾燥地域における農業生産拡大に伴う砂漠化問題のリスク軽減のためには、地域資源や生態環境、伝統や文化、歴史に対する理解、ニーズと現状の分析など、総体的に現況を把握することが前提であることが述べられた。



長澤徹明氏
(北海道大学大学院農学研究院特任教授)

現場報告：「JICA 海外研修生の受入について」



永田哲也氏(水土里ネットほっかい 総務課長)

現場報告として、農民が自ら組織する農民参加型水管理システムの構築を目的に JICA 海外研修生の受入を積極的に行っている『水土里ネットほっかい』永田氏に研修事業について報告が頂いた。研修事業では、研修項目毎に単元目標を設定し、土地改良事業に係る制度や土地改良区の役割を理解するための講義のほか、北海道や兵庫県での水管理施設や農業試験場の視察が実施され、研修生が自国で農民参加型水管理システムを構築していくためのアクションプランの作成・プレゼンテーションを行っていること等が報告されました。

現場報告：「国際協力を開発コンサルタントの視点から」

「国際協力を開発コンサルタントの視点から」と題して現場報告をこれまで、公務員、NGO、JICA、そして開発コンサルタントと様々な組織において様々な角度から地域開発・国際協力に携わった経歴をもつ、現役コンサルタントから見た、開発コンサルタントの役目、やりがい等が、現場報告を交えて菊池氏によって紹介された。国際協力に興味を持った経緯、現在に至るキャリア形成、そして現在、モロッコ国農村開発計画に携わりながら、日々実践し、思うことなど、これから開発コンサルタントを志す人々に興味深い内容が話されました。



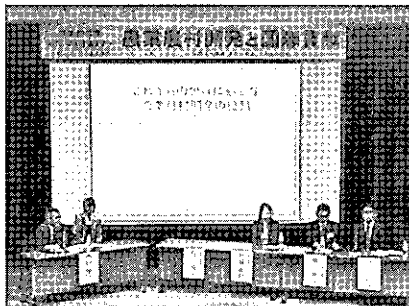
菊池淳子氏((株)三祐コンサルタンツ)

パネルディスカッション

「これからの世界に必要な農業農村開発の役割」

ファシリテーター西牧氏の司会の下、現役コンサルタントとして、途上国の農業農村開発に従事するパネラーによるパネルディスカッションが行われた。

各パネラーは従事してきた業務の概要を苦労話やエピソードも踏まえて、学生・一般の聴講者に対してもわかりやすい内容で説明を行った。会場の学生からも国際協力の仕事に就くために必要なスキル、心構え等について、現役コンサルタントであるパネラーに対して質問がなされた。



ファシリテーター：西牧隆壯(東京農業大学客員教授)
パネラー：松浦夏野(日本工営(株))
滝川永一(NTC インターナショナル(株))
保久太洋((株)オリエンタルコンサルタンツ)

会場には学生や官民の関係者及び一般来場者等約 300 人が来場され、盛況の内に幕を閉じることが出来ました。閉会後には、講師及び国際協力関係者と海外農業農村開発に関心を持つ学生との交流会も開催され、活発な意見交換がなされました。

今回のセミナーが少しでも今後の海外農業農村開発の発展のお役に立てたのなら幸いです。

ご講演頂きました各講師の皆様、本セミナーにご協力して頂きました皆様、ご来場頂きました皆様がこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。
(ADCA 地方セミナーワーキンググループ 中神)



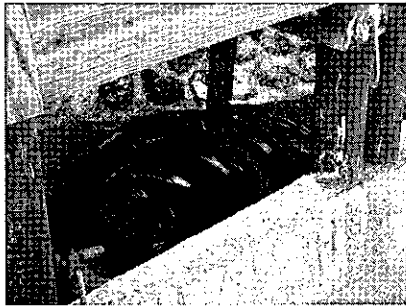
会場の風景

平成 23 年度 海外技術協力促進検討事業 官民連携技術協力促進検討調査

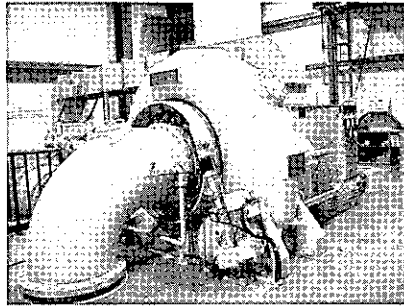
ADCA 事務局では昨年度に引き続き農林水産省の補助金を得て、平成 23 年度 海外技術協力促進検討事業 官民連携技術協力促進検討調査実施している。今年度は持続的地下水利用技術導入および自然再生エネルギー(小水力)活用について調査を実施中である。

自然再生エネルギー(小水力)活用検討調査については、まず日本国内において蓄積されている小水力発電技術、特に農業水利施設を使った技術について、8 月および 9 月に神流川沿岸農業水利事業者、水土里ネット那須野ヶ原、富

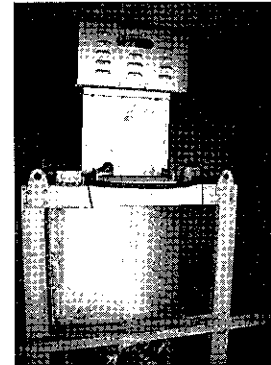
山県庁、石川県立大学に訪問し、聞き取り調査および施設見学を実施した。小水力発電には用水路に据え付け発電量が数kWのマイクロ発電とされる立型螺旋水車やカラン水車から、開水路をパイプライン変更し、発電量を数百kWの横軸フランシス水車など様々な形態の発電方法が見受けられた。また、導入におけるハードおよびソフト面に関する課題等の意見交換を行った。



螺旋水車



横軸フランシス水車



立型螺旋水車

10月11日、12月6日には有識者の方々や会員コンサルタントをお招きし、国内検討委員会（第1回、第2回）を開催した。会議では日本における小水力発電の技術および海外へ小水力発電を展開していくにあたっての課題、問題点、可能性について活発な意見交換が行われた。

国内検討委員は以下の通りである。

- 委員長 東京農業大学 西牧 隆壯 客員教授
- 委員 石川県立大学 環境科学科 瀧本 裕士 准教授
- 委員 日本工営(株) 電力事業本部 福島事業所 須郷康史 機電事業部長
- 委員 早稲田大学大学院 環境エネルギー研究科 横山 隆一 教授

上記検討内容を踏まえ、特に灌漑開発が進展しているにもかかわらず灌漑施設における小水力開発が遅れている地域と地理的制約から灌漑開発が遅れている山岳地域や離島地域があるフィリピン国を対象として、今年度の現地調査を12月に7日間の日程で実施した。

持続的地下水利用技術導入においては10月26日に有識者および会員コンサルタントをお招きし持続的地下水利用技術導入国内検討委員会(フォローアップ)（第1回）を開催し昨年引き続きブルキナファソ国での地下水有効利用技術について検討を行った。

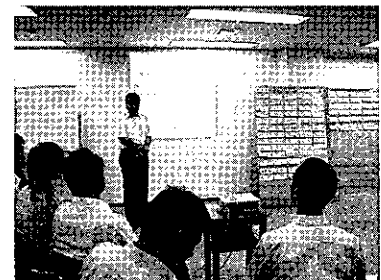
国内検討委員は以下の通りである。

- 委員長 東京農業大学 西牧 隆壯 客員教授
- 委員 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究所 農村工学研究所 資源循環工学研究 今泉眞之 領域長
- 委員 NTC インターナショナル株式会社 谷 茂 顧問
- 委員 運営委員4名

また11月16日～18日の3日間にわたり持続的地下水利用技術導入における技術会議として第1回PCM研修(モニタリング・評価)を講師に国際マネジメントシステム研究所 花田重義先生をお招きし開催した。本研修ではPCM手法を用いて、農業農村開発に携わる技術者の資質の向上を目的に実施され、ADCA正会員13人が参加し、グループワークを通してPCM手法を用いたモニタリング・評価について習得に努めた。対象としては、昨年度および初級に引き続き、ブルキナファソ国での地下ダムを使用した農村開発を対象に行った。

PCM手法（初級：計画・立案）開催

協会では農業農村開発に携わる技術者の資質の向上を目的として2011年9月6日から8日までの3日間、講師に国際マネジメントシステム研究所 花田重義先生をお招きして、PCM手法（初級：計画・立案）研修を実施した。PCM手法とは、プロジェクト・サイクル・マネジメント（Project Cycle Management）の略称で、参加型開発手法を用いて、開発援助プロジェクトを計画・立案し、運営・管理する手法です。研修にはADCA正会員および賛助会員より16名が参加し



ループ演習を通じて、PCM手法を用いての計画・立案について習得に努めた。今回は日本語テキストの改定を行い、また対象となる地域もブルキナファソ国と一新して実施した。アンケートでも講習についておおむね良かったとの意見が多く、理解度テストも前回に比べてポイントが上がるなど良い結果が得られた。

ADCA 講演会の開催

協会では6月、7月、9月と3回のADCA講演会を開催した。第1回ADCA講演会は2011年6月28日に独立行政法人国際協力機構農村開発部 部長 熊代輝義氏をお招きし、「農業農村開発の最近の動向」と題し講演頂いた。

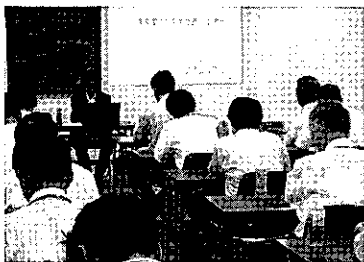
第1回講演では近年の世界情勢やJICAの動向、主に農業農村開発におけるODA全体での移り変わり、そして最後に今後の課題についてお話頂いた。今後の課題としては平和構築、食料安全保障、気候変動対策、発展段階に応じた対応や、プログラム化の推進についてなど5つが挙げられ、食料価格高騰における具体的なアクションを提案いただいた。提案としては短期的には緩和的支援を実施し、中長期的には予防的な支援を各地域・国の状況に応じて実施していくことが挙げられた。また、質疑応答では会員コンサルタントや聴講者から案件形成の向上のための方法、プロファイの重要性、PPPやBOPにおけるJICAの考え方など多くの質問が挙げられ、活発な意見交換がなされた。

第2回ADCA講演会では今年度よりADCAの理事に就任した早稲田大学大学院 松岡 俊二 教授をお招きし、「ADCAに期待すること ～地球持続性の視点から～」と題して2011年7月26日に開催した。

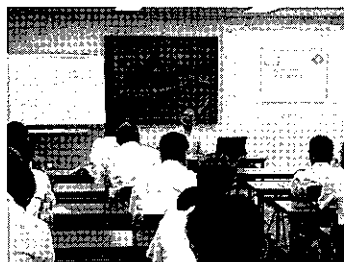
松岡氏の専門分野は環境経済学、環境政策論、国際環境協力論、国際開発協力論、政策（プロジェクト）評価論であり、研究内容および今後の国際開発について講演して頂いた。現在の研究事業としては、科研費・挑戦的萌芽研究（2011-2013）：「制度論アプローチによる地球持続性学の構築」（代表）および早稲田大学・重点領域研究（2011-2013/2015）：「複合巨大クライシスの原因・影響・対策・復興に関する研究：原子力災害とリスク・ガバナンス」（代表）などを実施されていた。今後ADCAに期待することとして2点あげられ、1. 新たな開発協力アプローチの模索として、プログラム・ベースド・アプローチ、PPP、日本の農業・農村と途上国について2. 新たなAgenda、Scopeの設定として制度構築：東アジア農業協力制度、農業・農村の「環境産業化」、農村と都市：田園都市について提案頂いた。

第3回講演会は2011年9月21日に国際協力機構企画部 業務企画第二課 課長 大竹智治 氏をお招きし、「最近の円借款の動向」と題して開催した。講演では有償資金協力の部門別、年度別の実績および傾向についてご説明いただいた。また農林水産部門の具体的事例としてインド、パラグアイ、モザンビークなどアフリカ、アジア、南米の各プロジェクトを織り交ぜながらお話いただき、今後の国際協力重点方針や、円借款の制度改改善による迅速化、本邦技術活用事業条件（STEP）についても講演頂いた。

円借款の迅速化としては①案件発掘・形成のための専門家/調査団の活用②より適切な案件形成のための事前説明会の実施③案件の進捗管理強化（モニタリング会合の開催）④借入国政府のCapacity Development 支援の強化⑤F/SからD/Dへの切れ目無い実施など様々な事例を挙げ説明頂いた。講演後の質疑応答では震災による影響や、現場からプロジェクト実施による様々な質問が挙げられ、活発な意見交換が行われた。



第1回講演会



第2回講演会



第3回講演会